

〔共同研究：日本人大学生用の学際的英語教科書〕

桃山学院大学新英語カリキュラムの提案

中 井 紀 明

は じ め に

英語教育が重視すべきなのは「実用」だ（平泉）、いや「実用」ではなく「教養」だ（渡部）という『英語教育大論争』以来日本の英語教育に対する批判は数多い。文学畑出身の英語教師である私にトラウマのように取りついてきたのが、日本の英語教育がダメなのは英文科出の教師が文学中心の「教養」教育をしているからだという批判である。この針のむしろの上で日本英文学会も全国大会で、私の参加したものだけで今まで4回ものシンポジウムを開いて「実用」英語教育を批判してきた。しかしながら大変残念なことに、「実用」英語教育に対抗する大学英語カリキュラムを英文学会関係者が開発したという話はいまだに聞かない。本学英米文学関係者も例外ではなく、ほとんどが大学英語教育カリキュラム作成に興味を示そうとはしてこなかった。この間隙をついた動きが本学にはあった。文学部を廃止したうえで作り出した国際教養学部で、英語学、言語学関係教員担当の科目だけのカリキュラムで「英語コミュニケーション」専修として英語のできるエリート層を育てるという試みである。英米文学関連科目ではなく、英語学、言語学関連科目を学習すれば「英語コミュニケーション」能力がつくという主張は今まで誰も主張したことがない。当然予想されたことであるが、このカリキュラムが劇的な成果を上げたとはとても言えない。

英語を習得しようと希望する学生を日本の大学は今まで文学部「英文学科」、「外国語大学」、「英文学部」という名前で引きつけようとしてきた。本学の文学部、国際教養学部の学生のみが英語の単位数が多いのも同じ狙いだ。しかしながら世界の市民の養成を目指す桃山学院大学では社会学部の学生も経営学部の学生も経済学部の学生も世界に飛び出していくための英語力をつけるべきではないだろうか。世界の市民として国連などの国際機関の職員など世界に雄飛する人材を全学から送り出したいという思いで私はこの提案を書いている。

本カリキュラムの目標

世界市民としての必要十分な英語の四技能（スピーキング、リーディング、リスニング、ライティング）を習得する。

キーワード：マクロ・リーディング、MITOCW、ミクロ・リーディング、オンライン・ラーニング、Content-based learning

本カリキュラムの特色

1 ライティング・スピーキング

言葉は使用して(言って、書いて)初めて覚えられるのだから、「表現」能力の養成(ライティング・スピーキング)を最重視する。リーディングの場もいつも表現の場(スピーキング・ライティング)につながるようにする。クリティカル・ライティングを本格的に導入して、クリティカル・リーディングと連動させる。

2 リーディングにパラグラフ・リーディング、マクロとミクロのリーディングそして、クリティカル・リーディングを本格的に導入する。

3 共通教育科目と専門教育科目に MITOCW, MOOCS 科目を本格的に利用する。

1 ライティング・スピーキング

全国の大学で長年行われてきた「英会話」クラスの多くでは、英語で話したことなどまったくくない学生がしばしば沈黙、時に眠りに落ち込んだり、時にそこに座っているのが苦行になったりする。話せない、議論できない学生も、「話し」「議論する」ことを教える術を知らない教師もお手上げ状態で、「こんなことも知らないのか」と学生を一方的に叱責する教師までいる。教師の一方的な「講義」で、会話が成立していないことも多い。

本年度春学期に英会話クラスをサポートするクラスを担当する機会を得たので、英語母語教員の英会話クラスにも毎回参加して英会話クラスの問題点を探った。(クラスの名は英語 IVA と言い週二回90分クラス30名、一回は英語母語教員、一回は日本人教員が担当する。英語母語教員、日本人教員は互いに連絡を取り合うことになっていた。)このクラスは全学でもっともレベルが高いということで楽しみに参加した。さすがに学生の側の「沈黙」「眠り」はなく、教師の側からの「軽蔑」「叱責」も全くなかった。ペアに分かれての会話練習もある程度「会話」をしていると思えた。しかしもっともできる TOEIC 受験を目指す学生に話を聞いたところ驚くほど低い目標であった。大部分の学生には英語表現力があまりなく、そもそも英語の表現を意識的に覚えていくという習慣がついているようには思えなかった。

それで教材として使用中のフランク・キャプラ監督の『素晴らしきかな人生!』を見、詳細な注釈付スクリプトで確認して、厳選した120の“useful expressions”を覚えてもらうようにした。意識的に“useful expressions”を覚えるという習慣をつけるために、すでに当共同研究で収集してきた資料の中から文法的(特に5文型)、単語、イディオムの三点で「基本的な」表現を夏休み中に選び出して秋学期に「練習問題」として学習してもらっている。学生は当然のことながら双方向の「対話」「会話」を望んでいるのだが、英語教師としての私の診断は、学生は「濃縮英語基本表現集」による「千本ノック」「素振り千回」を必要としているというものである。学生は「紅白試合」「練習試合」としての「英会話」クラスを望むが、その前に地味な練習である「千本ノック」「素振り千回」が絶対に必要だ。これを日本人教師の私がクラスで行い、英語母語者のクラスで「紅白試合」「練習試合」をやっても

らうという希望だ。

スポーツや軍隊の単調で苦しい訓練・練習の苦しみと、ゲームの刻々と変わる状況への臨機応変対応という楽しみの要素を語学は持っている。紅白戦、練習試合、公式大会すべて見て楽しめるゲームである。しかし楽しいゲームの背後には軍隊の訓練に似た激しい練習がある。リスニングやリーディングは野球の守備に似ているし、スピーキングやライティングは打撃だろうか。打撃は時に単打、時に長打や本塁打、時に左に引っ張り時に右に流し、ときには確実にバント、時に意表を突くドラッグバント。そして苦行に似た打撃練習の背後には苦行に似て単調な素振りがあり、筋トレやランニングがある。自主トレもある。

外国語学習をゲームとか遊びというよりは、スポーツとか軍隊の訓練としてとらえる必要があるが、そのためには必須の条件がある。スポーツや軍隊の訓練の後には訓練の成果が実感される。筋トレを相当期間行った後ではバットが軽く感じられ、スイング速度が格段に速くなり、飛距離が伸びる。チューブを引いて相当時間砂浜を走り回った後では投球の際の軸足のぶれがなくなり球筋が安定するのを投手は実感する。選手が感じる練習の「成果」に相当するものを英語の各クラスで受講生は感じているだろうか。「初級英会話」のクラスを受けた後で、臆せずになんとか言いたいことを言う自信がついただろうか。次の「中級英会話」では更なる成果を楽しみにできるようになっているだろうか。「読み」のクラスでは著者の思考に刺激を受けて、著者と対話しながら考えることが身についただろうか。この実感があって初めて学生の大学での英語学習は軌道に乗ることになる。力がついたら実感できない英語クラスが多すぎる。

ライティング・スピーキングについては今年度の会話科目担当の体験を踏まえて二つの提案がある。(1) 文法・イディオム・単語の観点から集めた『英語基本表現集』はすでにほぼできあがっているが、これを参考にしてそれらを生きた文脈の中で学生に提供したい。(たとえば本学に日本研究で留学中の学生と日本人学生がルームメイトとして大学の寮で一年を過ごすという設定で「英語基本表現集」すべての基本表現を織り込んだ膨大なシナリオを執筆し、CD化する。(DVD化ではない。映像は音声に学習者の十分な注意がいかないようにするから避けたい。))これには関連するリーディング教材、練習問題なども加えて、スピーキングだけでなく、ライティングの能力の養成も考慮する。(2) (1)の教材をパソコンで学習する。一課をパソコン相手に「練習」し一課終わるたびに、学習成果を英語担当者、英語母語留学生、日本人適格学生らが一人30分以上の「英会話」で確認する。(この英会話クラスは30人クラスで90分かけるのではなく、30人×30分である。学生は30人クラスの中に無言の匿名学生として沈潜することができなくなる。学生は毎課ごとに英語で対話することを強制されることになる。この「会話」クラスは30人クラスでも20人クラスでも10人クラスでもない。究極の一人個別クラスである。

「和文英訳」の練習しか経験がない日本人学生にとって英語でのライティングは未体験の領域である。そもそも中・高生は日本語での作文もしっかりした訓練を受けていない。また

そのような学生を受け入れる英語教員の間にも英作文指導の長い経験とノウハウの豊かな蓄積がなされていない。本学の「論述作文」は大学に入って初めて学ぶ「日本語作文クラス」であったが、ここに英語教材を入れて日本語作文教育と英語作文教育を「クリティカル・リーディング&ライティング」として復活する。Critical Reading & Writing というのはイギリスやアメリカの大学一年次に行われている科目で、論理学、誤謬論、言語哲学などを読み書き能力養成に使っている。日本語と英語の豊富な例題、練習問題で基本的な読みの切り口を学び、クリティカルに読む訓練をする。論じられる主張の要素、特に理由と結論、原因と結果を見分ける方法、前提を確認し評価する方法、表現と考えをはっきりさせ解釈する方法、主張を評価する方法、異なる種類の議論を評価する方法、分析、評価して、説明を作り出す方法、分析、評価して決定を下す方法、推論を導き出す方法、議論を導き出す方法、などを修得する。イギリス・アメリカで培われたこの分野でのさまざまな洞察を我々英語教師も学びとって、日本語教材と英語教材を共に使ってクリティカル・リーディング&ライティングを教えたい。その「クリティカルに読む」ためのさまざまな洞察が「書く」際のさまざまな指針になる。日本語テキストの分析、英語テキストの分析それぞれが双方の分析の手助けになることが予想される。

2 リーディング

「訳読」に堕した「読み」から限りなく離脱して著者という他者と読者との出会いの場、他者の思考の軌跡への共鳴・参入の場へと「読み」の場を活性化していく必要がある。文献は情性で読むのではなく、「異化」して「ミクロ」と「マクロ」で「読む」ことを本カリキュラムでは実践していく。

大学に入ってくる学生は単語・文・そしてせいぜいパラグラフ、短いエッセイを読む学習しかしていない。文を連ねて著者はパラグラフを作り、章を作り、本にまで伸ばしていく。一方読み手の日本の学生は文を越して文の連なりを辿ってパラグラフに、そしてそのつらなりの中から最重要な文（トピック・センテンス）を見つけ出すという訓練を受けていない。この現実に合わせて読みをミクロの読みとして提案したい。英語科目ではMOOCS, MITOCWなどの海外の無料オンライン大学講座群を利用するが、学生が聴講する科目群の教科書、論文を全てパソコンに入力し、頻度分析で羅列された文脈から離れた「文」を、学生が文レベルの得意の読みで教科書の中での意義を「推測」するのである。これが私の言うミクロの読みである。またこのミクロの読みの場は文を作ることを学ぶための場でもある。頻度別に集められている頻度別例文集でまた文献の文を表現別に頻度の高いものから分類整理しリストを作り、文脈から外れた一文一文を英語表現として「ミクロ」に学習していくこともする。

この「ミクロの読み」に対して、「マクロの読み」も一、二年次に訓練する必要がある。パラグラフ、章を超えて、論文全体、本全体を把握するのが「マクロの読み」である。各パラグラフのトピック・センテンスを辿って行って作成する精密な「梗概」をもとに論文全体、

本全体を掴み作者という他者との対話を試みる。梗概で読むことには抵抗を感じる英語教員が予想されるが、日本の高校を出たばかりの学生に大量のアメリカの大学教科書を読ませることはできない。梗概化することはアメリカの学生が読む量を十分の一以上短縮するが、思想は学生がマクロにしっかりと把握できるようにする。ミクロの読みで「表現」を追い、マクロの読みで著者の「思想」を追うのである。文単位でしか学生は読めないから、エッセイ、本全体を各パラグラフのトピック・センテンスを辿って素早く読んでいく「マクロ・リーディング」の訓練を最初のうちは学生にもやらせる。しかし学部生にはすべての教材を自前の「梗概」へと短縮する能力も時間もない。大部分の梗概はカリキュラム開発する教師が作って準備することが、無料オンライン大学講座の利用が日本でも可能になる一つの鍵なのだ。

英語表現の「ミクロ」な学習の中から「マクロ」な読みの中では捉えきれなかった洞察があちこちで浮かび上がってくることも期待される。英語表現の習得と著者の考えの把握とを共に狙うこの「マクロ」と「ミクロ」な「読み方」をクリティカル・リーディングなどとともに読みに導入する。「読み」が訳読だけではないことを一年次から知ってもらうのである。

3 MITOCW, MOOC の本格的利用について

共通教育科目も、学科教育科目も相当数を、MITOCW や MOOCs の学部科目群から選ばれることにしたい。このことは日本人大学生には不可能なことに見える。中国大学生が利用する MITOCW 科目の多くには中国の大学関係者が作成したであろう中国語訳が準備されている。「講義内容」を母語でまず手取り早くつかんでしまおうというこのやり方を我々は取らない。我々の目指しているのは講義「内容」と共に講義を英語教育に利用することである。英語力のない学生も利用できるように講義の正確な講義録、教科書・参考文献抄録、講義録・教科書・参考文献の頻度別文例集、議論を深めて理解をより確実なものにする質問集、論文テーマを選ぶためのヒント集などを準備してオンラインに載せてもらう。我々の準備したものが日本人聴講生だけではなく全世界の聴講生に重宝されることが予想される。初年度用として当面、共通教育科目として人文、社会、自然科学からそれぞれ三科目、学科教育科目として各学部四科目程度の上記教材を準備する必要がある。

私はすでに本年度春学期に学科教育科目の一つで MIT 人類学科の「変貌する家族」という科目を私なりに修正を加えて利用した体験を持っている。その体験を基にした MITOCW や MOOC の利用について稿を新ためて論じたい。

お わ り に

「実用」対「教養」論争は無意味だったと私は考える。この新カリキュラムではコミュニケーション能力を身につけるとする「実用」性も「教養」という「内容」も互いに排他的ではなく相互補完的に存在している。文学も文法も特別視することなく、利用することが学習効率を高めるときにのみ使われる。我々は高校では学習してこなかった「英語」教育をする

のだから、高校での学習の復習とか大学への導入教育もない。あるのは、四技能とも世界の市民にふさわしい英語力を付けるべく絶えず学生の学習効果を検証し、検証に基づいて改善されていくカリキュラムである。

参 考 文 献

平泉渉・渡辺昇一（1975）『英語教育大論争』文藝春秋

Lightbrown, Patsy M. and Mina Spada. 2006. *How Languages are Learned*. Oxford: Oxford University Press

大津由紀雄編（2005）『小学校での英語教育は必要ない！』慶応義塾大学出版会

大津由紀雄編（2005）『日本の英語教育に必要なこと』慶応義塾大学出版会

大津由紀雄・江利川春雄・齋藤兆史・鳥飼玖美子（2013）『英語教育，迫り来る破綻』ひつじ書房

Stryker, Stephen B. and, Betty Lou Leaver. ed. 1997. *Content-based Instruction in Foreign Language Education: Models and Method*. Washington, D. C: Georgetown University Press.

鳥飼玖美子（2006）『危うし！小学校英語』文春新書

鳥飼玖美子（2010）『「英語公用語」は何が問題か』角川書店

（2013年12月2日受理）

A New College English Curriculum: A Proposal

NAKAI Noriaki

I suggest in this article that the university should adopt a systematic English curriculum of content-based instruction. Students actually audit MITOCW and MOOCS undergraduate courses and English teachers at the university help them audit the courses with our originally prepared materials.

For reading I suggest two ways of reading, macro and micro reading. Macro reading follows authors' ideas by reading abstracted articles and books. Micro reading is the reading of sentences from textbooks sorted according to the frequency of the vocabulary in each sentence. Although it is called Micro reading, it is intended to help both reading for students not accustomed to go beyond words and sentences, and for their writing and speaking model expressions. Students coming into the university are not daring enough in reading in English to go into chapters and books; series of sentences and paragraphs are intimidating to them. Sentences should be an appropriate length for them, and they will read sentences individually and guess the situational meaning in the chapter or the textbook: for example, is the sentence used as one of the reasons or causes or examples in the paragraph it belongs to? Students are expected to get models of expression, and from the numerous sentences bound together before them they can perceive and learn a usable expressive pattern.

For writing and speaking we provide students with *Essential Expressions in English for College Life*. Expressions are sorted according to situations and tailored for the university and are expected to help students in all situations at the university.

In all the courses they take or audit here or on the Internet, they will write papers and practice speaking in various forms, from individual interviews, class discussions, short presentations and others.

English teachers offer critical reading and writing courses both in English and Japanese and will cover all of the courses in liberal arts education for the first year.